

学院創立者・校長・院長歴代記略

寺 西 裕 加 恵
栗 木 順 子
若 山 晴 子

昨年夏休み前の一日、S (Senior High School, 神戸女学院高等学部 of 伝統的略称) の自治会の役員さん方の訪問を受けた。秋の文化祭に学院の歴史に関する展示をしたいとのこと、その「材料」を求めておいでであった。文書史料館風の性格を専らにしている当史料室としては、そのまま展示して一般生徒諸嬢の目をひき得るようなものを持っていると思えなかったが、歴代院長の写真と筆跡などは如何？ともちかけると、大いに関心を示されたので、図書館所蔵の古い写真の接写複製などと共に、これらのコピーをとりまとめて提供する約束をした。

しかし、こうして改めて考えてみると、神戸女学院百十余年の歴史上、神戸の「女學校」として創立されて以来の校長、「神戸女学院」と改称して以来の院長は、通算して十一代に及ぶが、それぞれの時代にそれぞれのやり方でこの学校を代表し支えてきて下さった方々について、我々は今どれほどのことを知っているものであろうか？と気になる。歴代の中高部長・学長についても同様である。勿論、それほど表立った立場にはなくても、学院のために貢献された方々は無数で、その記録も、いずれは機械に助けてもらってでも整備しようとの心づもりはしているが、とりあえず、この夏の出合いを一つの縁と思って、提供した「材料」をもとに簡単なメモをとりまとめておくことに

した。その一端をここに御紹介する。——とはいへ、本稿は、紙数や持ち時間の制約があつて、ありあわせの写真とい
たつて簡略な経歴の羅列の域を出ず、本意ではあるが、これをもとに更なる調査をお求めの向きには、当史料室、
時に応じて可能な限りの史料検索に努めてお答えするつもりである。

× × ×

さて、神戸女学院が神戸の市中に、米国伝道会系のミッション・スクール、神戸の「女學校」として創立されて以
来の歴代校長・院長の系譜は次のとおりである。

一八七五年	十月—一八八〇年	八月	創立者・校長	ミス	イライザ	タルカット
一八八〇年	九月—一八八二年	一月	第二代校長	ミス	ヴァージニア	A・クラークソン
一八八二年	三月—一八八二年十二月		校長代理	ミス	イライザ	タルカット
一八八三年	一月—一八九九年	八月	第三代校長・院長	ミス	エミリー	M・ブラウン
一八九九年	八月—一九一五年	九月	第四代院長	ミス	スーザン	A・ソール
一九一五年	九月—一九四〇年	八月	第五代院長	ミス	シャールロット	B・デフォレスト
一九四〇年	八月—一九五四年	三月	第六代院長	畠中	博先生	
一九五四年	四月—一九六五年	三月	第七代院長	難波紋吉先生		
	この年三月—十月		院長代行	丹部トモ学長		
一九六五年	十月—一九七一年	九月	第八代院長	有賀鐵太郎先生		

この年十月—七二年四月 院長代行 溝口靖夫学長

一九七二年 五月―一九七五年十一月 第九代院長 小宮 孝先生

この年十一月―七六年十二月 院長代行 岡本道雄学長

一九七七年 一月―一九八八年十二月 第十代院長 岡本道雄先生

八九年一月―九〇年九月 院長代行 山口光朔学長・前学長

一九九〇年 十月―現在 第十一代院長 城崎 進先生

各先生方については、同窓会誌『めぐみ』や、学報、学院史中に言及もあるが、以下はその簡略な紹介である。

創立者・校長 タルカット女史 (Miss Eliza Talcott, 1836-1911.)

タルカット女史の日本渡来は、「切支丹邪宗門禁止」の高札の撤去令が出たばかりの一八七三年三月のことであった。米国伝道会初の日本派遣独身婦人宣教師としてダッドレー女史と共に来日し、協力して、神戸に女子のための学



校を開く。これが今日の神戸女学院である。女史はその後岡山に、また京都に駐在して広く伝道活動に精励するが、晩年は再び神戸に戻り、神戸女子神學校を足場として、実地の伝道活動と共に伝道婦養成の事業にも盡瘁し、七五歳で帰天。神戸春日野墓地に葬られた。(墓のちに修法ヶ原に移されて今日に及ぶ。)神戸女学院は女史の誕生日五月二十二日を「創立者記念日」と定め、墓前礼拝を守ってきた。☆女史に関する文献史料については、『学院史料』(以下「史料」と略す)の一、四、五、六、七号参照。

創立者 ダッドレー女史 (Miss Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906.)



タルカット女史と共に米国伝道会の独身婦人宣教師として来日。早くから三田方面の伝道活動に参画し多くの実をあげた。女學校創立の契機の一つはこの時の縁も与って力があつた。学校は寄宿制であつたので女史は主として寮母の役を勤めたが、間もなく健康を害して学校業務から手をひき、市井の婦人のための伝道活動とその他の伝道婦養成の事業に力を注いで、同じく宣教師として来日していた従妹のバロウズ女史と共に神戸女子傳道學校を創立した。一九〇二年健康上の理由で帰米。☆「史料」一、六、八、九号等参照。

第二代校長 クラークソン女史 (Miss Virginia Alzade Clarkson, Mrs. Cady, 1851-1940.)



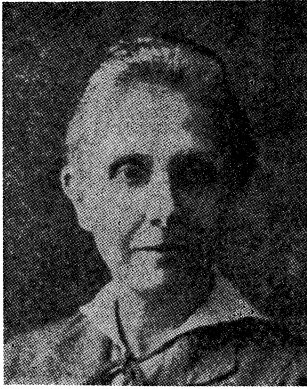
来日は一八七七年十一月。神戸の女學校の学校事業の専任者たるべく米国伝道会から遣わされた。一八八〇年秋のタルカット女史の岡山転出後、唯一人の独身婦人宣教師として女學校を守り、学校の教育課程の整備に奮闘するが、健康を害して帰米。学校は暫定的にタルカット女史に委ねられ、また続いてブラウン女史に委ねられる。クラークソン女史は一八八五年に再来日して同志社女學校に入り、翌年、同僚宣教師のC・M・ケディ師と結婚した。一八九二年引退。☆本学院関係史料は「史料」一〇六号、『めぐみ』等参照。

第三代校長・院長 ブラウン女史 (Miss Emily Maria Brown, Mrs. Harkness, 1858-1925.)



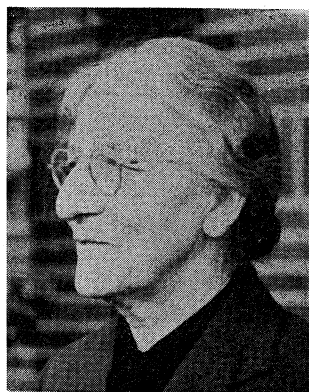
米国伝道会の独身婦人宣教師として一八八二年秋に来日した女史は、校長婦米中の神戸英和女學校に着任し、一年余で校長職の重責を荷った。大学在学中に知遇を得たソール女史の輔佐を得て、校地の整備、学制の改革を実施し、女子高等教育の実現のために力を盡くしたが、世は反動的国粹主義の時代に入り、キリスト教学校の本領を保持するための苦闘には並々ならぬものがあつた。女學校は一八九四年に神戸女學院と改称して感慨を示したが、女史自身は過勞に倒れ引退婦米を余儀なくされた。☆「史料」七号以下、『めぐみ』他。

第四代院長 ソール女史 (Miss Susan Annette Searle, 1858-1951.)



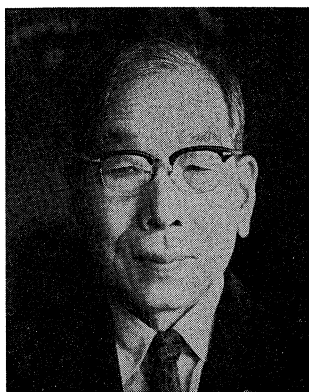
ブラウン女史に遅れること一年、神戸英和女學校に着任した女史はよくブラウン女史を輔け、また、一八九九年にその跡を襲つて一六年、更に名誉院長として一四年を學校のために捧げ、一九二九年引退婦米の途につく。学科組織の更なる充実を計りつつも、キリスト教教育の徹底に盡瘁し、一八九九年の訓令第一二号にも屈しなかつた。音楽科の創設(一九〇六)、四年制専門部の設立認可(一九〇九)、「キリスト教信徒共励会」創立(二八九三)、「キリスト教女子青年会」結成(一九二二)を実現。☆「史料」九号以下、『めぐみ』他。

第五代院長 デフォレスト女史 (Miss Charlotte Burgis DeForest, 1879-1973.)



米国伝道会日本派遣宣教師J・H・デフォレスト師の二女。神戸女学院在任は一九〇五年から一九五〇年に及ぶ。ソール院長に嘱望されて一九一五年にその跡を襲い、一九四〇年以後は名誉院長として学院のために盡力。その実績は枚挙に遑がないが、学院の岡田山への移転は一大壮挙であった。晩年は米国に在ったが、遺骨は日本に帰り、仙台の両親の奥津城に共に在る。☆父の伝記、自叙伝、詩集も含めて自著多数。数え子、同僚、後進の人々による追懐の記や評伝も多い。「史料」四、七号、『めぐみ』他。

第六代院長 畠中 博先生 (一八八五—一九六七)



日本組合基督教会の重鎮・畠中 博牧師の神戸女学院院長在任の時期は一九四〇年から五四年。今次大戦中よく学院のキリスト教精神を維持すべく果たされた盡力の数々は伝説的でさえあるが、これ以前にも、大学部長(一九三二—三五)、副院長(一九三五—四〇)、またその後は名誉院長、理事長(一九五七—六四)をつとめ、学院の運営・教育双方に多大の貢献がある。傍ら、牧会に、また、県や市の委員として、広くその足蹟をとどめた。☆History of Kobe College,『神戸女学院百年史 総説』六、七章、『めぐみ』他。

第七代院長 難波紋吉先生（一八九七—一九七九）



同志社大学教授、同専門学校長等歴任後、一九五三年に畠中学長の後を受け、翌年また畠中院長の後任となって、一九六五年三月まで二つの要職を守った。六〇年安保の騒乱をも含む在任中、『八十年史』を出し、八五周年記念祭を主催。『論集』、『学報』の創刊、大学研究所の設置、教職員組合の結成、第一回大学祭開催、大学科別入試実施決定、寄宿舎・中高部教室・プール・院長公舎の建設、図書館の増築、等、学院の発展充実に向けての多彩な事業が目立つ。

☆社会学、文化社会学に関する著書。追悼集『難波紋吉博士の人と学問』参照。

第八代院長 有賀鐵太郎先生（一八九九—一九七七）



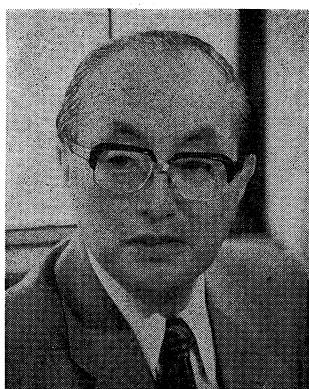
神学博士有賀先生の着任の延引は第二ヴァティカン公会議の故であったという。同志社と京都大学の教授、松蔭短期大学長、日本基督教協議会宗教研究所長を歴任後、一九六五年十月、神戸女学院院長に就任。一九七〇年度は中高部長をも兼任。この間、大学院設立が認可され、新体育館、AVセンター、新音楽館、新文学館、家政学部別館、文学二号館が竣工し、大学家政学部、後援会が発足した。☆『ヘブル書註解』『オリゲネス研究』『象徴的神学』『歩みは光のうちに』『キリスト教思想における存在論の問題』等の著書。

第九代院長 小宮 孝先生（一九〇二—一九七五）



関西学院教授、院長、理事、学長代理、名誉教授、名誉院長、名古屋学院教授、理事、大学監事を歴任の小宮先生の神戸女学院院长としてのキャリアは一九七五年、学院百周年の祝典から日も浅い十一月十六日、突然の訃によって閉じられた。「私は神様の命令で、百周年をするために、神戸女学院にやってまいりました」が口ぐせのようであったときが、神戸カレッジ・コーポレーションとのコンサルテーション、公開クリスマスや公開講座の開設もこの時期の事業として注目に価する。☆経済学上の業績。追悼記念式記録参照。

第十代院長 岡本道雄先生（一九二九—）



一九五九年大学非常勤講師、翌年専任講師として神戸女学院に着任。社会科学科主任、教務部長を勤め、一九七二年に学長に選任されたが、小宮院長の急逝により院長代行を兼ね、一九七七年一月一日附で第十代院長と発令されて、同年三月末に学長を辞し、爾来三期十二年院長職を荷い、専門の教育学の蘊蓄を傾けて「岡田山の教育」にとり組み、百周年記念建築—デフォレスト、タルカット、オルチン各記念館—の完成も見た。一九九二年松山東雲女子大学学長に就任のため、本学院を辞される。☆『百年史 各論』執筆、他。

第十一代院長 城崎 進先生

(一九二四—)



岡本院長三期目の任期満了に伴う後任人事は困難を極め、一年九か月に及ぶ山口光朗教授(当時学長)の院長代行の時を経てようやく一九九〇年十月、関西学院大学神学部教授・城崎進先生の着任を見た。関西学院での四十年に余る業績、そのうち十数年は、学部長、院長、学長代理、学長として教育行政にも捧げられ、温顔の中にも筋の通った風格を漂わせた新院長は、学院寄附行為の前文の誓約の遵守、「Students first」と立学の精神に生きることを言挙げしておられる。一九九一年五月からは

理事長も兼任。「希望に満ちた将来像の樹立と実現」のためのアピールが出ている。☆「学報」九号、一〇一号、「史料」九号、KC自治会新聞部通巻一六六号参照。

